チート転生！！

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チート転生！！

【Ｎコード】
Ｎ７７８４Ｍ

【作者名】
暁

【あらすじ】
何もかも普通な高校生、如月　零が行くネギま！の世界えのチート転生。
彼は、ネギま！の世界で生き延びられるのか？

第1話　神（笑）と俺（前書き）

どうも暁です。今回夏休みという長い時間ができたから書かせていただきました。これが処女作なのでどうぞよろしくお願いします。

第1話　神（笑）と俺

第1話　神（笑）と俺

俺の名前は、如月（キサラギ）　零（レイ）。いたって普通の高校生である。成績、顔、身長などなどどれをとっても普通である。まあ、少し違うところといえばオタクな所ぐらいだろう。さっきまで学校にいたんが今は何もない真っ白な空間にいる。せっかく彼女（妄想）とキャッハウフフな事（エロい事じゃないよ）していたのに・・・

「ちょっといいか？」

「・・・誰だ！」

「今の間何？まっいっか。まあ私は神だ。」

「なっなんだと・・・」

「まあ驚くのも「じいちゃん！」誰がじいちゃんだ！」

「はいはい神（笑）ですね。精神病院に行きましょう。俺がついて

ってあげますから。」

「本物の神だ！あと（笑）はよけいだ！」

「で、その神様とやらここはどこだ？それとなぜ俺はここにいる？」

「ここは神の間。それとお前は死んだからここにいる。」

「・・・なぜ俺は死んだ？」

「私が殺したからだ。まあ暇つぶしで。」

「クソォォォォォォォォォォ死ねやこのやろぉぉぉぉぉ」

「ま、待て。今なら転生さしてやるぞ。」

「まじ？」

「まじだ。今ならチートもいけるぞ。」

「オッシャァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ」

「そんなに嬉しいか。」

「なぁ神様？」

「（（笑）からいきなり様付けか）なんだ？たいていの事なら叶えてやろう。」

「よし、まず転生先はネギま！にしてくれ。」

「よしわかった。」

「次に、身体能力と魔力と気はマックスにしてくれ。」

「わかった。というかめんどくさいからいっきに言ってくれ。」

「大丈夫なのか？」

「あたりまえだ。何せ私は神だからな！」

「まず、魔法と気とありとあらゆる武器と武術に関する知識とそれを扱う才能を。
サイレンに出てくるライズ、バースト、トランスを使えるようにしてくれ。
あとそれに関する知識と扱う才能あと脳の負担も無くしてくれ。」

俺サイレン好きなんだよね。アゲハが使ってる暴王の月（メルゼズ・ドア）とか使いたいよね。脳の負担なくしたらもうかなりのチートだよ。

「次にこれは重要なことだ。」

「なんだ言ってみろ（いきなりいきなり真剣な顔になってよっぽど重要なことなんだろう）」

「顔を超イケメンに。身長は１８０ぐらいそして不老にしてくれ！！！！！！」

「わ、わかった（そんなことかい！）不死はいいのか？」

「不死だとつまんないからな。あとダイオマラ魔法球をくれ。中の時間と重力は自由に変えれるようにしてくれ。あと中に俺が知りたいことが書いてある本がある図書館を作ってくれ、あと鍛冶場も作

ってくれ。」

「図書館は１００歩ゆずってわかるがなぜ鍛冶場を作る？」

「武器も１から作るんだよ！」

「まあ鍛冶場作るんだったらそれしかないか。」

「行く時代は原作開始から５００年位前にしてくれ。」

「そんなに前でいいのか？」

「ああ、原作開始までになれないとね。」

「わかったこれで全部か？（やっと終わる・・・）」

「ああ、それじゃやってくれ。」

「よし逝くぞ・・・はっ！」

「なんか字がおかしいし。まてよ・・・ここはお約束的に・・・やっぱり落ちるぅぅぅぅぅぅ
死ねやこの糞神ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」

第1話　神（笑）と俺（後書き）

誤字、脱字、感想があったらどんどん書いちゃってください。
待ってます。

主人公設定（前書き）

どうも暁です。今回レイの容姿など詳しく書いてなかったということで
主人公設定をかきました。

主人公設定

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜主人公設定〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

本名　転生前　如月（きさらぎ）　零（れい）

転生後　キサラギ・レイ

身長　１８０ｃｍ

体重　６５ｋ

年齢　不明（ずっとダイオラマ魔法球内で修行してたため。

１０００歳がすぎた時点で数えるのをやめたので

１０００歳は確実に超えている。）

容姿　史上最強の弟子ケンイチの谷本　夏
着ている。　いつもは黒いスーツ（ネクタイはしてない）を
ローブと　戦闘時は、それに黒いフード付きのローブにグ
　　仮面（某黒の死神（BK201）がつけているやつ）

性格　仲間には優しいが敵には容赦しない。
キレる。　自分が好きな事をしているときに邪魔されると

好きな事　敵を殲滅すること（戦闘狂ではない。）と本を
読むこと。

嫌いな事　好きな事をしているときに邪魔されること。
　自分のことをかってに詮索されること。

好きな言葉　「速やかかつ完璧な殲滅だけが、争いの連鎖を
断ち　切ることができる。」←某ロシア軍大佐の
言葉

魔法　すべての魔法が使える。闇の魔法も使える。
（最高４重装填までできる）

始動キー　デス・デスカトル

武術　空手、柔術、弓術、中国拳法、ムエタイ、ボク
シング　コマンドサンボ、プンチャック・シラット、カ
ラリ・　パヤットなど（最後の方は、ほとんど使わない）
が　使える。

武器　剣、刀、槍、斧、弓、鎌、ハンマーなどいろい
ろな　武器を使える。
ちなみに自分で流派をつくった。

如月流　神鳴流と同じように武器は選ばない。

ＰＳＩ（サイ）　サイレンに出てくるすべてのキャラのＰＳＩを使える。

＊パクティオーカードやアーティファクトなどがきまったら付け足します。

主人公設定（後書き）

今日学校で勉強会あったんですけどめんどくさかったです・・・
けど今年受験あるので勉強頑張んないといけません・・・
それでもまあしっかり書いていこうと思います。

第2話　チートえの第1歩（前書き）

どうも暁です。やっと2話書き終わりました。

第2話　チートえの第1歩

第2話　チートえの第1歩

「うぁぁぁぁぁぁーーーーー死ぬうううううううーーーーー」

～ただいま上空2000メートルからのパラシュートなしのダイブ中～

あの糞神め、いきなり落としやがって！しかもめっちゃ高いじゃん。

魔法も気もPSI（サイ）もまだ使えないし・・・

もうどうすんだよ！

～地上まで残り500メートル～

どうする・・・どうすればいい。転生してからいきなり死ぬなんて冗談
じゃないぞ！これからチート全開で原作ブレイクしようと思ってたのに・・・

～残り１００メートル～

ぶわーって感じで魔力とか気を体中から出れや！ライズだ！ＰＳＩは
イメージだから体が硬くなるようにイメージするんだ！・・・
あ・・・俺の息子が硬くなってしまった！

「れいちゃん～だいぴ～ち」←某剣と兵器の申し子風に

～残り５０メートル～

やばい！！やばすぎて俺の息子も元気がなくなってきてるよ。
もう５０メートルしかないし・・・
誰か止めてぇぇぇぇぇーーーーー

「じぇろ～～～～～にも～～～～～～～～～」某元いじめられっこ格闘青年風に

ヒュ～～～～～～～～～～～～～～～～～ドガーーーーーーーーーン

あ・・・死んだかも・・・

「いてててて。何とか死なずにすんだよ。ていうかここどこだよ？日本には見えないし・・・というか山の中だし・・・回り見ても木しか
ないし。まっいっか。」

ヒュ～～～～～～～～～～～～～～ドガン

～レイ気絶中～

～1時間後～

「いってーーーーなんだよいきなり！　あ・・・もしかしてこれが魔法球か。
ちゃんと送ってくれたか。というかもっと違う風に送れや！頭上に落とす
やつがいるか！」

＜ここにいるぞ～～～～～＞

「こ、この声は糞神！姿現せや今すぐ殺してやる！！」

＜うるせぇ、さっさと原作ブレイクでもして俺を楽しませやがれ！＞

「（なんか口調とか性格変わってるし・・・）言われなくてもわかってるし！」

まあさっさと魔法球に入って修行でもするか。まあ、時間はできるだけ
伸ばして重力は１００倍くらいにするか。

～場所を移動して魔法球内～

ドン

「やべ、動けね。やべ・・・意識が・・・」

～1ヶ月後～

「意識は保てるようになったけど動けね。ちょうしこいて重力１００倍
なんかにするんじゃなかった。まあ、１００倍で生きてるだけましか。」

～1年後～

「やっと動けるようになったよ。まあ、まだハイハイしかできないけど・・・」

～１０年後～

「やっとまともに歩けるようになったよ。まあそしたら中を少し見て回るか。」

「おぉ～～～～すっげぇ～～～～めっちゃ広ぇ～～～～」

中に入ったらいきなりかなりでかい城と魔方陣が3つあった。この城たぶんエヴァの城参考にしているな。魔方陣は図書館と鍛冶場、そしてかなり広い平野に繋がっていて、平野にはまた魔方陣がありそこからは火山、雪山、森林などいろいろな環境の場所に行くことができた。

「予想以上にすごいな・・・」

ま、だいたい見て回ったし、魔法の練習でもするか。

～平野に移動～

「まずは簡単な魔法からか。さっき図書館で呪文とか調べたけど普通に字読めたし。それになんか1回読んだだけで覚えれたし。まあ、そこらへんは神がいろいろしてくれたんだろう。初心者の呪文はたしか・・・」

「プラクテビギ・ナル　火よ灯れ（アールデスカット）」

・・・ボォ

1回目からついたし・・・そういえば魔法を扱う才能とかももらったっけ。まあ、そしたらどんどんいくか。始動キーとか面倒だからいらないか。

「魔法（サギタ・マギカ）の射手・火の一矢」

ドガン

軽くクレーターができたよ。まあ、魔法の射手も大丈夫だな。次は上位古代語（ハイ・エイシエント）呪文の雷の斧でもいくか。雷の暴風もいいな。面倒だからいっきにいくか。

「雷の斧！！！つずいて雷の暴風！！！ついでに千の雷！！！」

やば・・・やりすぎた。まさか千の雷まで始動キー無しの無詠唱で出せるなんて・・・半径1キロぐらいのクレーターができたよ。ここはしばらく使えないな。たしか自動で修復されるはずだからしばらくほっとくか。

～5時間後～

やばいな・・・ここまでとは。すべての魔法、始動キーなしの無詠唱でいけたな。しかも闇の魔法（マギア・エレベア）までできたし。

～1時間前～

最後に闇の魔法いくか。これはいちょう詠唱するか。固定するのは奈落の業火にしとくか。

ラカンもネギに見せるとき奈落の業火固定してたし。

「プラ・クテビギナル来たれ（アギテー）　深淵の闇（テネブエラ・アビュシイ）　燃え盛る大剣！！（エンシス・インケンデンス）
闇と影と憎悪と破壊（エト・インケンデンス・ウンブラエ）　復讐の大焔！！（イニミーギナスウルティオーニス）　我を焼け彼を焼け（インケンダント・エメー・エト・エウム）
そはただ焼きき尽くす者（シント・ソーム・ル・インケンデンテース）　奈落の業火！！！（インケンディウム・ナエ）　術式固定！！！（スタグネット）
掌握！（コンプレクシオー）　魔力充填（スプレーメントゥム）
『術式兵装（アルマティオーネム）』！！！」

ラカンは自爆したけど俺は大丈夫みたいだな。

〜現在〜

まあこんな感じに結構簡単にできたよ。あと魔法は術式見直したりすれば完璧だな。あとオリジナル魔法とかとかつくりたいな。ま、魔法は１度おいといてつぎは武術のほうに行くか。

〜３００年後〜

だいたいの武術極めることができたな。武術っていってもかなりの数があるからな。１つ１つ極めるにも１つ何十年もかかるからな。え、その３００年間の事は話さないのかって？話さねーよ。つまんないし・・・まあ、空手、柔術、中国拳法、ムエタイとかまあほか

にもいろんなやつ達人級までいったよ。でも俺のチートボディでも３００年もかかったよ。

次はＰＳＩ（サイ）か。暴王（メルゼズ・ドア）の月からやるか。

～５００年後～

は～。だいたいのキャラのＳＡＩ（サイ）はつかえるようになったか。暴王（メルゼズ・ドア）の月もだいぶ改良できたし。それでできたのが暴王の牙。武器にトランスと暴王（メルゼズ・ドア）の月を混ぜたものをまとわせたマジキチ物だ。これでだいたいの魔法は防げるし、さらにこれで傷ひとつでもできたら傷が浅くてもそこから体内に俺のトランス侵入し心を蝕み破壊する。どんなに精神が強くても長くて１日で確実に廃人になる。まあ弱かったらすぐ廃人になるな。しかも廃人にするだけではなく操ることもできる。これを使えばたとえ真祖（ハイ・デイライトウォーカー）の吸血鬼でさえ殺すことができる。まあ、肉体的ではなく精神的にしか殺せないけどね。まあこんだけ修行したからもう最強だな。たぶんもう俺を倒せるの創造主（ライフメイカー）ぐらいしかいないだろう。

そしたらそろそろこっからでて原作ブレイクでもしにいくか！

第2話　チートえの第1歩（後書き）

第3話　野生のフェイトに遭遇
君ならどうする？

戦う　　話しかける

逃げる　→　殲滅

さあ、どうする？

第3話　野生のフェイトに遭遇（前書き）

どうも暁です。今回誤字があったので修正しました。　誤ＳＡＩ→正ＰＳＩ
教えてくれたトッシーさんありがとうございました。
これからも誤字、脱字があったらおしえてください。あと感想も待っています。

＊今回始動キーが出てきたので主人公設定に付け加えました。

第３話　野生のフェイトに遭遇

「あれ、ここどこだ・・・」

あれたしか、俺が魔法球に入る前はここは山の中でまわりには木しかなかったのに今は、ただの平野になってるし・・・まっいっか。今、原作開始から何年前ぐらいだ？けっこう魔法球内で修行してたからこっちで何年たってるかわからないし・・・町でも探して情報収集でもするか。それに金も稼がないといけないし。魔法球は影にしまってっと・・・早速行くか。

テクテクテク・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ！魔法使えるんだから飛んでけばいいか。」

～飛行中～

魔法って便利だよな。空も飛べるし・・・それにしてもなんもないな。ほんとここどこだよ。町に着いたらまず何しようか・・・やっぱりかねかせがないとな。やっぱり賞金稼ぎとかトレジャーハンターとかやるか。う～～～んどうしよう。なにすっかな・・・あれなんだ？なんかかなりでかいのが浮いてるし。あれ、そういえば原作でも浮いている大陸があったような・・・う～～～んなんだっけかな～～～。転生したときにした時に書いたメモには原作開始の２０年前からの出来事とか事件とか登場人物についてすか書いてないし・・・あっもしかしてあれってオスティアか？やっぱれオスティアだよな。まだ落ちてないって事は最低でも原作開始から２０年以上前って事か。まあ紅き翼（アラルブラ）が動き出すまで賞金稼ぎでもやりながら魔法世界をみてまわるか。それでもナギたちがラカンに襲撃される前にはナギたちと会いたいな・・・

～オスティアに到着～

それにしても広いな・・・こんなでかい都市どうやって浮いてるんだよ。ま、さっそく情報収集でもするかな。やっぱりここは酒場とかで情報収集するべきか？というかそれしか思いつかないし・・・さっそく酒場に行くかな。おっとローブは着てった方がいいな。何があるかわかんないし・・・金は・・・まっ大丈夫だな。

～酒場に移動～

ガヤガヤ・・・　ギィ　シーーーーーン

あれ？なんか入ったらいきなり静かになったし・・・それにめっちゃ見られてる。まあ無視するか。

ガヤガヤ・・・

おっ無視したらまた話し始めた。まあまだ何人かに見られてる・・・いや、にらまれてるし。まっいっか。たしか情報を買う時ってカウンターの方に座るんだよな。真ん中あたりに座るか。フードをしっかりかぶって。

「いらっしゃい。あまり見ない顔だが、ここは初めてか？」

「ああ、オスティアに初めて来たんでね。」

「そうか、いい所だろ。」

「ああ・・・」

「それで注文はなんだ？オススメはこれだが・・・」

「したらそれをもらおう。あと・・・」

「あとなんだ？」

「濁った水を・・・」

「・・・・・なにを知りたい？」

ちゃんと通じたよ。なんかの小説読んだときに情報を買うときに「濁った水」って言って情報をかってたけどほんとに買えるなんてね。

「紅き翼(アラルブラ)について・・・」

「紅き翼(アラルブラ)？なんだそれ。聞いたこともない。」

「そうか・・・」

そしたらまだ紅き翼(アラルブラ)はいないということか・・・まあ、まだ有名になってないだけかもしれないけど、まだ時間はあるってことか。

「そしたら完全なる世界(コズモエンテレケイア)について・・・」

「完全なる世界(コズモエンテレケイア)？しらねいな・・・」

「そうか・・・したらここらへんで1番高い賞金首はだれだ？」

「おいおい。そんなのきまってんでろ。いつの時代も1番高い賞金首は「人形使い(ドールマスター)」「闇の福音(ダーク・エヴァンジェル)」「不死の魔法使い(マガ・ノスフェラトウ)」などとよばれる真祖(ハイ・)の吸血鬼(デイライトウォーカー)、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだろ。まあ、こいつには手は出さないほうがいいぞ。いまもなお賞金が上がってるしな。しかも最近、史上最高額の600万ドルになったそうだ。」

「そうか・・・いくらだ?」

「いや、いやいらねいよ。」

「いいのか?」

「ああ、あんま期待にはそえれなかったしな。間、初回限定サービスだと思ってくれ。」

「ありがとうな。」

「なんか知りたいことがあったらまたここによってくれ。あと、さっきのなんか情報が入ったら次来たとき格安で売ってやるよ。」

「ああ、そしたらじゃあな。」

ギィ

思っていたよりも結構情報が集まらなかったな。まっいっか。次は賞金稼ぎで金お稼ぎながらメガロメセンブリアかアリアドネーとかに行くか。でもその二つまったくの逆方向なんだよな・・・やっぱりオスティアに1番近いメガロメセンブリアに行ってからかなり遠くになるけどアリアドネーにいくか。ていうかずっと考えながら歩いてたら町も出て人気のない森までまで来ちゃったよ。それより・・・いちよう仮面をつけとくか。

「そろそろ出てきたらどうだ」

なんか町からずっとずっとついて来てるし・・・はっきしうざいよ

ね。金魚のふんみたいにずっとついてきて。

ぞろぞろぞろ・・・

「おい、金目のものをおいてきな。したら命は助けてやる。」

なんか１０人ぐらい顔の怖い人？が出てきたよ。いや、もう１人いるな。そっちはうまく森に隠れてるみたいだけど様子見か？まあいい。さっさとかたずけるか。ここは・・・修行中に思いついたオリジナル魔法でいくか。でもこれ結構力加減が難しいからしっかり詠唱しないとだめなんだよな・・・でも、やっぱ無詠唱もいいけど詠唱したほうがかっこいいよね。しっかり始動キーも考えたし。やるか。

「おい、きいてるのか？」

「黙れ雑魚が・・・まあ喜べ。おまえらで俺のオリジナル魔法を試してやるよ。」

初めての相手がこんな雑魚とは・・・ずっと魔法球内で修行してたからなんか敵(まと)がほしかったんだよね～ま、森に隠れているのは少しは期待できそうだけど・・・じゃあやるか。

「おい、おまえらやっちまえ。」

「おう！！！」×9

「デス・デスカトル　彼を憎しみ憎悪と怒りの闇えと引きずり込め！！！　闇沼！」

「な、なんだ？いきなり沈みだしたぞ！」

これはサイレンにでてきた戸呂臣(とろとみ)のサンドクローラーを参考にしてつくったんだよな。これは表面は硬いが中はやわらかいから1度沈んだらどんどん沈み続けるし地面の表面に薄く暴王の月(メルゼズ・ドア)をつくることで魔法もきかないし、気や身体強化も無効かされる。1度はまったら泥沼のように抜け出すことができないマジキチもんだ。

「た・・・たすけてくれ・・・」

ぶくぶくぶく・・・シーーーーン

沈みきったか・・・そろそろもう1人も動き出すかな？

「そろそろ出て来い。あまり探られるのは嫌なんでね。」

「気づいてたのか・・・まあいい。ところで今の魔法とても興味深いね。」

「それより名乗ったらどうだ？」

「おっといけない。それは失礼した。僕の名前はフェイト・アールウェンクス。」

フェイトだと！あの？たしかナギが倒したのは2番目だからこいつは1番目か？まあ、2番目という可能性もあるが・・・でもなぜこいつは俺にストーカーみたいなことをしてるんだ？もしかしてそっちの趣味？

「いま、失礼なこと考えていなかったか？」

「いやいやとんでもない。ところで俺に何のようだ？」

「いや・・・たださっきの酒場で「完全なる世界（コズモエンテレケイア）」というのが聞こえてきてね・・・その名前をどこで知ったんだい？」

「教えねーよ。」

「そうかい・・なら死んでもらう！ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　おお　地の底に眠る死者の宮殿　冥府の石柱！」

「暴王の月（メルゼズ・ドア）・・・」

ドドドドドーーーーーーーン

「無傷とは・・・ほんとになんだいそれは？」

「俺に勝ったら教えてやるよ。」

「そうかい・・・ならそうさせてもらうよ！ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　小さき王　八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ　その光　我が手に宿し　災なる　眼差して射よ　石化の邪眼！」

「マテリアル・ハイ！」

ズシャァァァ1ーーーー

「これもきかないとはね・・・今度のそれはなんだい？見たことないが魔法障壁の一種かい？・・・なら障壁突破　石の槍！」

ドガン

「そんなやわなものじゃこれは突破できないぞ？」

「やれやれこんなチートバグがいるなんて・・・」

テッテレテーン　フェイトさんにチートバグと認定された

「ほめ言葉として受け取っとくよ。ではそろそろ終わりにしよう！
パイロキングサラマンドラ！」

一応、俺は男だからクイーンではなくキングに変えといた。

「ははは・・・なんだいそのばかでかいのは？」

「ふ・・・知りたかったらこれから逃げのびな！・・・・やれ。」

「無茶言わないでほしいな・・・」

ボォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーー

やば・・・やりすぎたな。ここの森すべて焼き払っちゃったよ・・・
まあ、さすがに死んだよな・・・まあどうせ人形だろうし殺しても
大丈夫だよな・・・町から人が来たみたいだし逃げるか。

～1週間後～

やべ・・・賞金稼ぎでもして賞金首を狩りまくろうとおもってたけ
ど・・・逆に狩られる賞金首になっちゃったよ・・・たぶん1週間
前のフェイトとの戦いを誰かに見られたんだな。というか森いった
い焼き払ったのにあそこから逃げのびたやついたにのかよ・・・し
かも100万ドルかよ！どんだけ高いんだよ！最近よく襲われると
思ったら・・・まあさいわいローブも着てたし仮面もつけてたから
素顔はばれてないけど・・・黒いフードつきのローブに仮面をずっ

とつけてたからなんか仮面の死神ってよばれてたよ。まあ、どうでもいいけど・・・そろそろナギたちに会いに行くか。戦場で遊(殲滅し)んでれば(てれば)いつかナギたちと会うか・・・じゃあさっそく戦場に行くか！

第3話　野生のフェイトに遭遇（後書き）

仮面の死神から戦場の死神えのランクアップ？　ｂｙキサラギ・レイ

とうとうレイはナギたちに会うのか？

第４話をお楽しみに～　（・@・）

第４話　嵐の前の静けさ（前書き）

どうも暁です。今回今後のストーリーなどを考えていて少し遅くなりましたが無事更新できました。

＊よく地名、登場人物の名前、技名などを間違えることがあります。何か見つけたら教えてください。

第４話　嵐の前の静けさ

第４話　嵐の前の静けさ

～数年後～

は～～最近少し殺すのに慣れてきた自分が怖いです・・・初めて人を殺したときが少し懐かしいです。初めて殺したときは毎晩夢に出てきてかなりうなされました。今はそんなことはありませんが・・・・ちみなに今は戦場だったところで野宿しています。だったというのは・・・

～先日～

「ここか・・・」

今は集めた情報を元に戦場を回っている。いつも戦場を回ってはそこで野宿してはまた違う戦場にむかう。このくりかえしだ。この生活を続けてかなり長いことになる。まあ戦場に来ても戦いにはなら

ないがな・・・一方的な殲滅に近いだろう。というか殲滅しかしてない。まあそのおかげで「仮面の死神」から「戦場の死神」や「炎帝」とかとよばれている。まあ炎帝とよばれるようになった理由は殲滅したあとのあと処理のせいだろう・・・いつも戦場に残った死体とかパイロキネスで焼却処分してたからな・・・それにまた賞金が上がってしまったよ・・・まあ、こんな事しているせいだからだけど。最初は１００万ドル（最初の金額がおかしいが・・・）からはじまってどんどんうなぎ上りして今じゃ３００万ドルまでいった。まあまだエヴァの半分だが・・・まあそんなことより・・・

「さっさと終わらせるか・・・」

～戻って～

まあこんな事があったんですよ。だから周りは焼け野原で何もなくなってるけど・・・それにしてもナギたちと会うために戦場を回ってるのに一向に合える気配がしないし・・・ここで何箇所目の戦場だよ！最近ヘラス帝国と連合との戦争が始まったからそろそろ出てきてもいいはずなのに・・・なんとしてもラカンが仲間になる前にナギたちにあわないとな。まあ次の戦場で会えることを祈りますか！

～ナギ side～

よう、俺は最強無敵の魔法使い千の呪文の男（サウザントマスター） ナギ・スプリングフィールドだ！今は仲間と一緒に戦場を歩いて回っている。それにしても・・・

「ここも焼け野原ですね・・・」

こいつは後衛担当の魔法使い「アルビレオ・イマ」だ。まあみんな「アル」とよんでいるがアルを一言で言うと変態だ。ロリコンというものらしい・・・

「戦場の死神が現れたんだろう・・・」

こいつは「青山 詠春」。旧世界から来た剣士らしい。たしか神鳴流（しんめいりゅう）とかいう流派で最近はサムライマスターとかとよばれている。詠春を一言で言うとムッツリスケベだ。

「そうじゃのう・・・」

そしてこれが俺のお師匠である「フィリウス・ゼクト」だ。お師匠は俺の魔法の師匠で一言で言うと爺くさい子供だな。

「ナギ！」×3

「な、なんだ？」

「今へんなこと考えてたろ？」

「何を言ってんだ詠春？俺がそんなこと考えると思うか？」

「思うな。」

「思うの～」

「思いますね～」

「お師匠とアルまで～」

～　ナギ　ｅｎｄ　～

～　アル　ｓｉｄｅ　～

私の名前はアルビレオ・イマ。気軽にアルとよんでください。私はおもに後衛担当の魔法使いで得意な魔法は重力魔法です。いまは私たちのリーダーであるナギといっしょに戦場を回っています。まあリーダーと言っても「馬鹿」ですけどね・・・

「ここも焼け野原ですね・・・」

最近はどこの戦場も焼け野原になって・・・たぶん戦場の死神がとおった後でしょうね。死神がとおった後は何も残らないことで有名ですからね。だから戦場で死神に会ったらすぐに逃げろといわれますかれね。戦場で彼に会ったら死亡率が一気に上がりますからね。

「戦場の死神が現れたんだろう・・・」

彼は「青山　詠春」。旧世界から来た「神鳴流（しんめいりゅう）」という流派の剣士です。彼がムッツリだとわかったとき私の仲間かと思い写真などいろいろあげましたがすべて斬られてしまいました（悲）。彼はどうも巫女が好きだったらしいです。それでもどこか親近感を覚えます。

「そうじゃのう・・・」

彼は「フィリウス・ゼクト」。ナギの魔法の師匠らしいです。でもどう見ても小さい男の子にしか見えません。（初めて会ったときはなぜ男の子なんだ！と、少し嘆きましたが・・・）　！！！今なんかナギがへんなこと考えた気がしましたね～（怒）

「ナギ！」×3

フフ・・詠春とゼクトも同じ事を考えていたんでしょうね。

「な、なんだ？」

ほんとに考えていたとはいけない人ですね～

「今へんなこと考えてたろ？」

詠春も攻めますね。もしかして詠春はSでしょうかね～

「何を言ってんだ詠春？俺がそんなこと考えると思うか？」

フフ・・言い逃れしようとするとは、ほんといけない人ですね。

「思うな。」

「思うの～」

「思いますね～」

「お師匠とアルまで～」

フフ・・ほんとあきませんね。

～　アル　ｅｎｄ　～

～　詠春　ｓｉｄｅ　～

私の名前は「青山　詠春」。旧世界出身で魔法世界には剣術修行をしに来ている。私の使う流派は「神鳴流（しんめいりゅう）」で青山家にだいだい伝わるものだ。ナギには魔法世界に来たときに初めて会いそれから今まで一緒に行動している。ちなみにいつもナギの行動には苦労している。たまに頭痛も酷いが・・・

「ここも焼け野原ですね・・・」

この優男は「アルビレオ・イマ」。魔法使いで後衛を担当している。ちなみにアルはロリコンである。そのまえなぜだか私に変な写真などを持ってきたが私の愛刀「夕凪（ゆうなぎ）」で斬ってやったらめっちゃへ込んでしまった。だが私は巫女が好きなんだ！

「戦場の死神が現れたんだろう・・・」

「戦場の死神」・・・数年前に現れた賞金首だ。最初は１００万ドルの賞金首だったが今じゃ３００万ドルの賞金首だ。死神が現れた戦場は必ずと言っていいほどすべてが焼け野原になる。戦場で１番会いたくない人物だ。

「そうじゃのう・・・」

今のは「フィリウス・ゼクト」。ナギの魔法の師匠らしい。口調は年寄りみたいだけど見た目は子供だ。ゼクトはまだ常識があるので助かっている。・・・！

「ナギ！」×3

アルとゼクトも同じことえお考えているらしい。

「な、なんだ？」

「今へんなこと考えてたろ？」

「何を言ってんだ詠春？俺がそんなこと考えると思うか？」

「思うな。」

「思うの～」

「思いますね～」

やっぱり同じ事を考えていたらしい。

「お師匠とアルまで～」

頭が痛くなってきた・・・

～　詠春　ｅｎｄ　～

～　ゼクト　ｓｉｄｅ　～

わしは「フィリウス・ゼクト」。こう見えても魔法使いじゃ。いちようナギの魔法の師匠でもある。しかしの～あの馬鹿弟師は覚えの悪さには頭が痛くなる。まったく呪文を覚えなくての～いまでもあんちょこを使っておる。

「ここも焼け野原ですね～」

こやつは「アルビレオ・イマ」。重力魔法を使い後衛を担当しとる。こやつと初めて会ったとき、いきなり嘆き始めておどろいた。そのあと詠春に聞いたがアルはロリコンというものらしい。ロリコンの意味聞いたとき少し引いてしまったのは、今でも覚えているの～

「戦場の死神が現れたんだろう・・・」

こやつは「青山　詠春」。旧世界出身らしく「神鳴流（しんめいりゅう）」とかいう流派を使うらしいのじゃ。いつも馬鹿弟子に悩まされているらしい。そのせいかわしによく愚痴っていたがけっこうしつこく、少しうざかったのう。

「そうじゃのう～」

戦場の死神は数年前に現れた賞金首じゃ。いつも黒いローブに仮面をつけておりその姿はまさに死神らしい・・・まあ、わしは見たことないんじゃがな。む、今馬鹿弟師が変なことを考えたような・・・

「ナギ！」×3

詠春とアルも同じ事を考えていたようじゃのう～

「な、なんだ？」

あきらかに動揺しているの～

「今へんなこと考えていたろ？」

やっぱり詠春も同じ事を考えていたのじゃな。

「何を言ってんだ詠春？俺がそんなこと考えると思うか？」

「思うの～」

「思いますね～」

「お師匠とアルまで～」

わしも頭が・・・

～　ゼクト　ｅｎｄ　～

～　レイ　side？　～

ハックショーーーーーーーン　う～～

「誰か俺のうわさをしてんのかな～」

そう言いながらさっそうと次の戦場えと向かうレイだった。

第４話　嵐の前の静けさ（後書き）

とうとうナギとレイが対面か？　第５話をお楽しみに。

レイの戦場での教訓？

困った時はとにかく殲滅しろ！後の事は殲滅した後に考えれ。

第5話　死神と馬鹿＋α（前書き）

どうも暁です。今回は少し短くなってしまいました。
あと少しありきたりになるかもしれませんが大戦時を書くことにしました。
意見、感想などは参考にするのでどんどん書いてください。

第5話　死神と馬鹿＋α

第５話　死神（レイ）と馬鹿（ナギ）＋α

戦場を歩いて回って何年もたつがいまだにナギたちと会えないな・・・俺というイレギュラーがいるからナギたちがいなくなったていう事はないよな・・・というかあれだけ俺が戦場で殲滅を繰り返しているのに帝国と連合の戦力はぜんぜん減らないのはやっぱり、裏に完全なる世界（コズモエンテレケイア）がいるのか？戦争を速く終わらせるにはやっぱり速くナギたちと会わないとな。おっと、やっと次の戦場に着いたか・・・では始めるとするか！

ドォーーードガァァァァ――――ン

～　紅き翼（アラルブラ）　ｓｉｄｅ　～

ドォーーードガァァァァーーーーン

「おいみんな、なんか聞こえないか？」

「聞こえますね・・・」

「聞こえるの～」

「聞こえるぞ。」

「よし、みんな行くぞ！」

「おぉ！」

～戦場に到着～

「あれは何だ？」

そこには焼け野原に1人たたずむ全身黒ずくめの男?がいた。

「あれは死神じゃないでしょうか?」

「死神?何だそれ?」

「知らないのかナギ?」

「アルも詠春も知っているのか。」

「知らないのか?」

「全身黒ずくめの人物ったらかなり有名ですよ。」

「なあアル。そいつは強いのか?」

「・・・強いと・・思います。」

「？なんでそんなはっきりしないんだ？」

「彼の姿を見て生きて帰れたのは、ほんの一握りしかいないから彼の情報はとても少ないんです。生きて帰れたとしても5体満足の人はさらに少ないので。」

「そんなに強いなら問題ねぇ！」

「？」×3

「あいつを仲間にするぞ！」

「何を言ってんですかナギ！」

「そうだぞナギ！死神を仲間にするなんて！」

「そうじゃ！ナギ、やめるのじゃ！」

「なんでだよぉ！お前たちも４人じゃチームとして少ないって言ってたじゃないか！」

「それでも死神だけはやめてください！」

「仲間を増やすにも俺たちについてこれる奴はほとんどいねぇ。ちょうどいいじゃねいか！俺は行くぞ！」

「待ってください！」

「そうだ！待つんだ！」

「待つのじゃ！」

「おい！そこの黒ずくめ！」

～　紅き翼（アラルブラ）　ｅｎｄ　～

～　レイ　ｓｉｄｅ　～

「おい！そこの黒ずくめ！」

ん？なんだ？・・・！！！あれってナギじゃねいか。したら後ろにいるのはアルと詠春とゼクトじゃねいか？ラカンがいないって事はまだナギたちはラカンに襲撃されていないんだな！よし！

「おい！聞いてんのか！」

おっとずっと無視してしまったのか。第1印象は大事だから早く返事しなければ。

「なんだ？・・・」

おい！第1印象は大事だって考えていたのにもっとこうなんかなかったのかい！ぶっきらぼうすぎるだろ！

「・・・・・・・・・・」

俺なんか変なこと言ったか？

「・・・お前俺たちの仲間にならないか？」

おっし！あっちから誘ってくれるとは・・・頼む手間がはぶけたな。

「だめか？・・・」

おっと早く返事しなければ。

「いいぞ。面白そうだ。」

やっと原作に介入できたか・・・

～　レイ　ｅｎｄ　～

～　ナギ　ｓｉｄｅ　～

呼びかけたはいいが威圧感が半端ねいな・・・

「おい！聞いてんのか！」

無視されているのかただ聞こえなかっただけか・・・

「なんだ？・・・」

！！！こいつはやべぇ。か、勝てる気がしねぇ。こいつから逃げ切る事も無理かもな・・・だが戦いてぇ！こいつと戦ったら俺はもっと強くなれる！それだけはわかる・・・
やべぇ！ずっと黙ったままだったか。

「お前俺たちのなかまにならないか？」

だめなのか？考えてはいるみたいだけど・・・

「だめか？」

ここで駄目だって言われたらな・・・

「いいぞ。面白そうだ。」

よし！これからは俺も面白くなりそうだ！

～　ナギ　ｅｎｄ　～

～　後ろから見守っていたメンバー　ｓｉｄｅ　～

「まさか死神が仲間になるとは・・・」

「ああ、だが最悪の展開はまぬがれたな・・・」

「そうじゃのう。あそこで仲間にならないと言ったら・・・」

「そうですね。彼が本気を出せば私たちはきっとひとたまりもありませんでしたからね・・・まあ、これでいいとしますか。それでは彼らの元に行きますか。」

「そうだな。」

「そうじゃのう。」

～　後ろから見守っていたメンバー　ｅｎｄ　～

第5話　死神と馬鹿＋α（後書き）

レイの戦場での心得？

戦場に反則なんて物はない。だからどんな手を使っても生き延びれ。

第6話　ラカンとレイの小規模戦争　（前書き）

どうも暁です。
最近小説の書き方が少し安定しませんがそこらへんはご了承ください。

第6話　ラカンとレイの小規模戦争

第6話　ラカンとレイ(チート)の小(環境破壊)規模戦争

今は俺が大好きな本を読んでいる最中だ。ナギたちと仲間になったからは本を読む時間ができてうれしいかぎりだ。そのナギたちというと鍋の用意をしていた。たしかラカンが襲撃をした日は鍋をしていたので警戒をしなければならない・・・

「おいレイ。」

「なんだナギ？今は本を読むのに忙しいのだが。」

今話しかけてくんなよこの馬鹿が。俺が本を呼んでいるのが見えないのかこの馬鹿が。大事なことなので2回言ったがもう1回言っとこう。この馬鹿が。

「いや・・・なんでいつも仮面をつけてローブをしっかりかぶってんのかと思って・・・」

あっ。もう慣れていてずっと忘れていたな・・・

「今まではずっと戦場を回って殲滅を繰り返していたからな・・・けっこう恨みを買っていたんだよ。」

「そうなのか・・・何でレイは殲滅を繰り返していたんだ?」

「昔”速やかかつ完璧な殲滅だけが争いの連鎖を断ち切ることができる”と言った男がいてね俺はそのとおりだと思うんだよ。争いは時間をかければまた新たな争いを生み中途半端に終わらせればまた新たな争いを生む。どちらかをおろそかにすれば新たな争いが生まれる。だから速やかかつ完璧な殲滅だけが争いの連鎖を断ち切ることができる。だから俺は殲滅する。」

まあその言った男というのは某ロシア軍大佐だけどね。生前この言葉は理解できなかったが今は理解できるような気がする・・・

「そうか、ところでレイその仮面取らないか。」

「はっ？言っている意味が分からない。」

さっきまでシリアスな雰囲気だったのにいきなりなんだよ。というかそんなに目を輝かせるなよ！というかその手は何だ！

「いや・・・ずっと仮面をつけているからさ、ちょっと気になって・・・取ってくれよ～アルたちも気になるよな～」

「気になりますね～」

「気になるな。」

「気になるのじゃ。」

お前たちまで・・・でも別にいいか。

「ああ別にいいぞ。」

それにしても仮面を取るのは久しぶりだな。

「「「「・・・・・」」」」

なっなんだよ。顔になんかついてんのか？

「いやなんか・・・むかつきますね。」

「無駄にかっこいいな。」

「そうじゃの。」

「うるせっ！というか詠春鍋のほうはいいのか？」

「やば！」

お前たちもさっさと鍋のほうに行け！俺は本を読むのに忙しいんだ。

～　ヘラス帝国のとある場所　ｓｉｄｅ　～

「対象（ターゲット）はこの３人の男に・・この赤毛の少年とこの金髪の男だ。」

「フン・・なんだガキとただの男じゃねぇか。」

「油断していると痛い目をみるぞ。オスティア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。すでに精鋭で組織された討伐隊も送ったがことごとく返り討ちだよ。君が望むなら部下もつけよう。正規兵ではなく傭兵・賞金稼ぎになってしまうが・・」

「いらねーよ」

「1人で十分だ、任せときな」

～　ヘラス帝国のとある場所　ｅｎｄ　～

「おいレイ。お前も本なんか読んでないでこっち着て一緒に食おうぜ！」

「ああ、これを読み終わったら行く。」

「そうか。んっふっふ～こいつが旧世界は日本の鍋料理ってやつかぁ！」

鍋料理か・・・転生してからは日本料理なんて食べてないからな～

楽しみだ。

「じゃ早速肉を～～～♪」

「あっナギおまっ・・何肉を先にいれてるんだよ！」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

というかトカゲの肉なんて食べれるのか？あまり旨そうには思えないが・・・

「いいじゃねいか。旨いもんから先でよホラホラ！（野菜なんて食ってられるか！）」

ひょいひょい

「バッバカ！火の通る時間差というものがあってだな。まずは野菜を入れて・・あーちょっ！」

「あーうっせ、うっせーぞえーしゅん！」

お前のほうがうるせえよこのバカが。静かに本も読めないじゃねいか！

「フフ・・詠春。知っていますよ日本では貴方のような者を・・・」

「”鍋将軍”・・と呼び習わすそうですね。」

「ナベ・ショーグン！？」

「つ・・強そうじゃな。」

「わかっよ・・詠春俺の負けだ。今日からお前が鍋将軍だ。」

「（鍋奉行じゃ・・？）んー・・嬉しくないなー」

「全て任す。好きにするが良い。」

「おお何じゃこのソースうまいぞ？」

「ほんとだうめえっ！？」

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ。」

「これがしょうゆか、スゲェうめぇっ・・・姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな。」

これは聞いといたほうがいいよな・・・いちよう

「なあナギ、姫子ちゃんてだれだ？」

「レイは知りませんでしたね。」

「オスティアの姫御子のことじゃ。」

「そうか・・・」

「まあ・・戦も終われば彼女を自由にする機会も攫めるやも・・です。」

「その戦だが・・やはりどうにも不自然に思えてならん。」

まあ後ろで完全なる世界（コズモエンテレケイア）の狂信者たちが戦争を長引かせようとして

いるからな・・・

「なにが？」

「何もかもだよ！お前が言い出したんだろが！鳥頭。」

ヒュ～～～～～～ドガン

・・・・・・

「食事中失礼～～～～～～ッ　俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン‼いっちょやろうぜッ‼！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「レイ・・・おぉ！？」

パタン・・・・

「（やべぇな・・・レイに鍋が飛んでいくとは・・・しかもよりによって本を読んでいるときに・・・）」

「（やばいですね・・・）」

「（やばいの・・・）」

「（やばいな・・・）」

「ははは・・・本を読むのを邪魔された挙句鍋まで・・・」

「（キレてるな・・・）」×４

「どーしたー来ねーのかぁーーーー来ねーならこっちから・・」

「あいつ死んだな・・・」

「そうですね。」

「そうだな。」

「そうじゃの。」

「フフ・・お前1度死んどけ！」

「おほ！」

「お前たちは手を出すなよ！」

「わかったよ！（せっかく久しぶりに骨がありそおなやつだけどレイがキレているしな手は出さないほうがいいな・・）」

～　レイとラカン　ｓｉｄｅ　～

「いきなりお前かよ！たしか情報５　金髪の黒いスーツの男　弱点なし　特徴　最凶。」

確か最近加わった男で加わる前は戦場の死神と恐れられた男。まあ今でも死神とよばれ帝国に恐れられているが、もと３００万ドルの賞金首。連合側につくということで元老議員によって賞金が取り下げられたとか・・・

「いいのか？おっさん剣なしで。」

「心配すんな俺は素手のが強ぇ！お前のほうこそいいのか？」

「お前は素手のほうが強いらしいが俺は素手のほうも強ぇ！」

いちよう転生したときの一通りの武術達人級まで鍛え上げたからな。

「フン！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ゴシャッ

今の一撃は確実に達人級の一撃だな・・・我流でここまで鍛え上げたなんて完璧バグキャラだな。

～13時間後～

「おいラカンとか言ったか？」

そろそろ決めるか・・・

「なんだ～？」

「そろそろ決めないかー？」

「そうだな！」

「そしたら俺の一撃を耐えてみやがれ！」

「いいぜぇ！」

「雷声！！！」

普通の雷声は特殊な呼吸法で横隔膜を振動させ、体を一つの弾丸のごとくする太極拳の秘法だがさらにライズとバーストさらに魔力と気の反発を利用して瞬間のスピード、威力、貫通力などをあげた最凶の一撃だ！

「気合防御！！！」

防ぎきれるか！

～　レイとラカン　ｅｎｄ　～

「フ・・フフやるじゃねいか・・」

「おまえこそな。まさかあの一撃を耐え切るとは・・・」

「やはりあなたはバグキャラでしたね。」

ピロリロリン☆　アルからバグキャラに認定された！！！

「アル！おまえらいままでなにしていた？」

「いや長くなりそうだったので鍋を再開していました。」

もしや鍋を食べれるのか！？

「アルもちろん残っているよな～？」

ギギィ

「モ、モチロンデス・・」

「おいアル、こっち見て言えよ。しかも片言になっているぞ？」

「残念ですが・・・」

な、何だと・・・

ガクン

「そ、それよりいいのですか彼をほっといて・・」

なんかはぐらかされたような気がするが・・・

「ああそうだな・・なあナギ？」

「な、なんだ？（なんだよいきなり）」

「あいつ仲間にしないか？」

「そうだな！あいつなら俺たちにもついてこれそうだし・・おいお前俺たちの仲間になんないか？」

「いいぜー今度はお前とも戦いてぇーからな！」

ピロリロリン☆　ラカンが紅き翼（アラルブラ）に入った。

第6話　ラカンとレイの小規模戦争　（後書き）

レイの戦場での心得？

仲間（戦友など仲間と認たもの）がピンチのときは必ず助けろ！

第7話　ナギのM疑惑（前書き）

どうも暁です。
今回少し遅くなりました。最近パソコンの調子が悪くて・・・
次はできるだけ早く更新できるようにしたいです。

第7話　ナギのM疑惑

第7話　ナギのM疑惑

「なあレイ？」

「なんだナギ？」

じつは今はラカンと戦ったときからだいぶ日にちが過ぎている。えっ？とびすぎだって？いいんだよべつに。それより今日まで結構いろんなことがあった。まず紅き翼（アラルブラ）が前線に復帰しグレートブリッジ奪還作戦参加し大活躍した。この戦いでナギは敵兵には「連合の赤毛の悪魔」味方には「千の呪文の男（サウザントマスター）」とたたえられた。ちなみに俺は敵兵には「死神」と恐れられた。なんか悪魔と死神がそろったよ・・・あと味方にも「死神」とよばれるようになった（泣）ちなみに奪還作戦後ナギのファンクラブができた。ちなみの俺のファンクラブもできていた。

「その前さ～ラカンと戦ったときに使った最後の一撃どうやったのかなと思って・・・」

「私も気になりますね～ラカンの気合防御を突き破るだけの一撃でしたからね。」

「俺も気になるな。」

「あっ！詠春いたんだ・・・」

だぁーーーーーー

あっ詠春逃亡。最近詠春が空気である。ちなみに今いるのはナギとアルと詠春だけだ。ラカンはバカンスでゼクトはどっかいってガトウとタカミチは情報収集をしている。えっガトウとタカミチてだれかって？ガトウ、本名は「ガトウ・カグラ・バンデバーグ」元連合の人間らしい。タカミチの本名は「タカミチ・T・高畑」でなぜか魔法は使えない体質らしい。

「さっきの続きいいですか？」

「ああ・・最後に使ったのは”雷声”だ」

「雷声？なんだそれ。」

「あれはもう雷声とは言えないが元となったものは太極拳の秘法と言われる雷声だ。」

「なぜ雷声とは言えないんですか？」

「それはだな・・まあ・・」

「なんだよレイはっきりすれよ。」

「なんだ・・まあ本物の雷声よりやばいものになってしまったんだよ。」

「どれくらいやばくなったんですか？」

「普通の人に使ったなら間違いなく消し飛ぶな・・」

「そんなものつかったんですか？」

「あのラカン（バカ）なら大丈夫かなって思って・・・」

「それはそうですね。」

「そうだな！」

「ちなみに本来の雷声は特殊な呼吸法で横隔膜を振動させ体を一つの弾丸のごとくするものだったが俺の雷声はさらにライズとバーストと魔力と気の反発を利用して瞬間の威力、スピード、貫通力をあ

げたかなりやばいもんだ。」

「？？？？？」

「どうしたアル？」

「いま聞いたことのない単語が聞こえて・・レイ、ちょっと聞いてもいいですか？」

「いいぞアル。」

「ライズとバーストってなんですか？」

あれ？言ってなかったっけ

「う～～ん簡単に言えば超能力みたいな？」

「レイって超能力使えるのか？すげぇーー！！！」

「すごいですねぇ。」

「ちなみにこれはＰＳＩとよばれＰＳＩの力は基礎となる３つの力から構成されている。その３つの力は”裂破のバースト””心破のトランス””強化のライズ”だ。「バースト」は念動力や発火現象など内なるＰＳＩを物理的な波動に変え外界にはなつ力、「トランス」はテレパシーなど人間の内なる心界へ働きかける力、「ライズ」は人体の感覚機能、筋力や治癒力を高めるＰＳＩの力だ。ちなみにＰＳＩ使いは全員この３つの力を持っている。」

「そうなんですか。」

「おいみんな！」

「！！！・・・詠春か・・」

まじ詠春空気だったわ～まさか俺にきずかせすに俺の後ろを取るとは詠春意外とやるな！まあこんなこと言ったら詠春がまた落ち込むから言わないけど・・・

「なんだその反応・・まあいい。今さっきガトウから本国首都えのよびだしがあった。来るやついるか？俺は行くが・・」

「俺は行く。」

「ナギが行くなら俺も行こう・・」

「私は行くのはよしときましょう。」

「じゃあ早速行くか！」

～　本国首都　～

「なんだよガトウ、わざわざ首都までよびだして・・・たいしたことなかったら交通費請求するぞ！」

首都まで来るのにけっこう金かかったよ・・・まあ俺の全財産に比べたらカスに等しいけど。転移魔法とか使ったらもっと速くこれたのに魔力（ナギ）バカとかムッツリ剣士（詠春）は転移魔法使えないし・・・トリック・ルーム使えばいいとか言う人とかいるかもしれないけどあれ意外と移動できる距離短いんだよね。いちよう５０キロ以上移動できるけどそれ超えたら指定した場所じゃないところに着くときあんだよね・・・

「それは勘弁してほしいな・・よびだしたのは会ってほしい人がいる、協力者だ。」

「協力者？」

「そうだ・・・」

どうせ先にたしかなんとか議員だかが出てくるんだろ？というか何で先に出て来るんだよ・・・

「マクギル元老議員！」

なんか先に出てくるってわかっててもむかつくな・・・頭に変な触覚つけやがってむしりとるぞ！！

「（ぞくぞく・・なんか変な汗が・・）いや、わしちゃう・・主賓はあちらのお方だ。」

カツカツカツ・・・・・

「ウェスペルタテェア王国アリカ王女・・」

ほう・・・これはかなりの美人だなまあ俺はMじゃないからツンデ

レはおことわりだけど・・ていうかこう考えたらナギってMか？今度ちょっと試してみようかな・・・フフ・・おっといけない、そのときの事を考えてみたらアルみたいな笑方をしてしまった。
あの後はガトウがいろいろ話をしていた。まあ俺たちは会っただけだったけど・・・あの後はナギとラカンがいろいろ言い合っていたが俺は無視して本を読んでいた。ちなみに最近アルに何か面白い本はないかと聞いたらなぜか官能小説を渡された。このとき読んでいた本はアルに渡された官能小説だったことはまた別の話だ・・・

〜　数日後のとある一室　〜

「まさかこんな・・・」

「ようガトウ、どうしたいそんな深刻な顔して・・」

「そうだぞ渋い顔ががさらに渋くなっているぞガトウ。」

ちなみに俺はさっきまでラカンと一緒にバカンスを楽しんでいた。

「ああ・・ラカンとレイか。ついにやつらの真相に迫るファイルを手に入れたのだが・・」

軽く無視されたよ・・・

「いやこの話はラカンは興味はないだろう・・それよりこっちのほうが深刻だ。この男にも「完全なる世界<コズモエンテレケイア>」との関連の疑いが出てきた・・大物だよ。」

「こいつは・・今の執政官じゃねーか!!」

「なんだと・・」

「驚くのも無理は「ラカンが執政官とわかるとは!」・・・」

「どうしたんだガトウ?」

「いや・・最近レイがわからなくて・・」

「なんだ・・

ズズゥンッ

「なんだ!?」

「あれは・・・ナギとアリカ姫だな・・」

「レイ見えんのか?」

「いちおうな・・また詠春が頭抱えそうだな・・・」

「ちげぇねぇ！」

第7話　ナギのM疑惑（後書き）

レイの戦場での心得？

殺す覚悟と殺される覚悟をつねに持て

第8話　フェイトとの再会と騎士の決意（前書き）

どうも暁です。
とうとう次は最終決戦です。お楽しみに・・・

第8話　フェイトとの再会と騎士の決意

第８話　フェイトとの再会と騎士（ナギ）の決意

あの後ナギが帰ってきた後予想道理詠春が頭を抱えたのは言うまでもない。ちなみに今はマクギル元老院議員にナギとラカンとガトウと一緒に会いに来た。

「マクギル元老院議員」

「御苦労、証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ・・法務官はまだいらっしゃいませんか。」

「法務官は・・・来られぬことになった。・・あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここにきて・・慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね。私の意見ではない、そう考える者も多いと言うことだ。時期が「ぐだぐだ言ってねーでそろそろ正体を現したらどうだ？」

「なに言ってんだレイ！」

ボォーーーン

「ちょーーーーーっ！？ナギまでなにやってんだよっ元老院議員の頭をいきなり燃やしておまっ・・」

「ナギお前もきずいてたのか？」

「ああ・・」

「ガトウよく見ろ！」

「何っ・・・」

バサ・・・・・中から白髪の少年が出てきた

「よくわかっね千の呪文(サウザントマスター)の男、死神。はじめまして・・・死神には久しぶりと言ったほうがいいかな・・」

「久しぶりだなフェイト何百年ぶりだ?死にぞこなったか?」

「いや死んだよ前の僕はね・・」

「そうか・・ならもう一回殺してやるよ!行くぞナギ、ラカン!!!」

あっ!ガトウの事忘れていた・・・

「おう!」

「ああ！」

フォッ・・ヒュッ・・2人の男がいきなり出てきてナギたちの道をふさいだ

「くらえ・・」

「通しませんよ・・」

ドォーーーーーーーーーーーーーーン

ザシャーーーーー

「強ぇぞやつら！」

「ハッハだが生身の敵だ！政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ・・万倍！！！戦いやすいぜッ！！」

「そうだな！」

政治家とかだとマジやりずらいからな・・・

「フッ・・・わ、わしだ！マクギル議員だ！うむ反逆者だっ！ああ・・うむ・・確かだ。やつらに暗殺されかけたっ・・は、早く救援を頼むっ。スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデバーグ奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！あとキサラギはわれわれを裏切った！今も狙われている。軍に連絡をっ・・」

「げ！・・」

「やられたな・・」

「レイちゃん大ピ～～～～チ！！！」←久しぶりに某剣と兵器の申し子風に

「レイ！！こんなときにふざけんな！」

現実逃避ぐらいさせてくれよ・・・

「いくぞ！おぉおぉ！！」

ドンッ

「・・・君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらうよ！また死神・・」

「トリック・ルーム！！！」

ドォゴォォォォーーーーーーン

バシャン

「レイ・・もう少し考えて送ってくれよ・・・」

「うるせぇ！無傷なだけありがたいと思え！！それより・・」

また賞金首もどっちゃったよ・・俺はもともと連合に協力すると言う事で賞金を元老議員に取り下げてもらっていたのに・・・

「昨日まで英雄呼ばわりが一転、反逆者か・・・ヌッフフいいねぇ。人生波乱万丈でなくちゃな♪」

「タカミチ君たちは脱出できたかな・・・」

「・・・・・姫さんがやべぇな。」

～　数日後「夜の迷宮（ノクティウス）」にて　～

ドガァーーーン・・・ガラガラ

「よお来たぜ、姫さん！」

「遅いぞ我が騎士！！！」

フフ・・我が騎士って・・・

～　秘密基地に移動　～

「何だこれが噂の「紅き翼（アラルブラ）」の秘密基地か！どんな所かと思えば・・掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだよこのジャリはよ！」

「ゆるしてやれラカン。きっとこいつの頭はパーなんだよ。」

「何だ貴様ら無礼だろう！」

「へっへ～ん生憎ヘラスの皇族にゃ貸しはあっても借りはないんでね。」

「おれもないな・・」

ヘラス帝国にしたことといえば戦場にいた軍を殲滅して5，6回壊滅に追い込んだぐらいしかないな・・・

「何ぃ？貴様何者だ！」

「俺は伝説の傭兵剣士、千の刃のジャック・ラカンだ！！！」

「なに？貴様が千の刃だと！？」

自分で伝説の傭兵剣士とか言って笑えるわ・・・というかそのまま
どっか行くなよ。こいつどうすんだよ。

「じゃあ俺もこれで・・・」

グイ

「まて・・貴様は何者だ！」

「チッ・・・」

逃げ切れなかったか・・・

「おいおぬしチとはなにじゃチとは！それより速く名乗れ！」

「わかったよ。俺は死神のキサラギ・レイだ。」

「なに！？貴様のような死神なわけないのじゃ！！（こんなカッコイイやつが死神な分けないのないのじゃ／／／きっと極悪人みたいな顔してるのじゃ）」

「いや俺が死神だが・・」

「なら証拠を見せるのじゃ！！！」

証拠ったら・・・久しぶりにあのかっこうするかな・・

バサァ

「そ、その仮面と漆黒のローブ・・・・・ギャァーーーーーー」

～　ナギ　side　～

ギャァーーーーーー

なにやってんだレイは・・・

「さーて姫さん。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ！連合にも帝国にも・・あんたの国にも味方はいねぇ。」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で・・最新の調査ではオスティアの上層部が最も「黒い」・・という可能さえ上がっています。」

「やはりそうか・・我が騎士よ。」

「だからその「我が騎士」って何だよ姫さん！」

俺はクラスで言ったら魔法使いなのに・・ハズかしーな！

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主は最早私のものじゃ。」

「な！？・・・」

「連合に帝国・・そしてオスティア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。じゃが・・主と主の「紅き翼（アラルブラ）」は無敵なのじゃろ？」

「世界全てが敵――――――――良いじゃないか！こちらの兵はたったの８人・・だが最強の８人じゃ。」

「ならば我らが世界を救おう！！！我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ！」

だから俺は魔法使いだっつーのに・・・

「やれやれ相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ・・・いいぜ！俺の杖と翼あんたに預けよう。」

～ ナギ end ～

～ レイ side ～

まさかこの場面を生で見れるとは・・・ちなみにテオドラ（皇女をつけたら怒られた）はラカンではなく俺の肩の上に乗って静かにしている。顔が赤かったのはきっと気のせいだろう。それか風邪を引いていたんだろう。ちなみにアルにうらやましがられた。

〜

レイ

end

〜

第8話　フェイトとの再会と騎士の決意（後書き）

レイの戦場での心得？

戦場で背中を任せていいのは真に信頼できる仲間だけだ

第9話　最終決戦（前書き）

どうも暁です。
今回新しい小説を書いたので小説の途中から書き方が少し変になってしまいましたがそこらへんはご了承ください。

第9話　最終決戦

第9話　最終決戦

あれからは原作道理仲間を増やしてきた。まあそこらへんは頭脳派に任せたんだけど・・ちなみに今は最終決戦直前だ。話が少し飛んだって？そこらへんは気にするな！

「不気味なぐらい静かだな・・奴ら。」

「なめてんだろう・・悪の組織なんてそんなもんだ。」

「意外と逃げる準備でもしてんじゃね？」

まあホントはそうだといいんだが・・・

「ちげえねぇ！」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

若いな～セラスさんこの年でアリアドネーの総長か・・

「おう！あんたらが外の自動人形や召喚魔をおさえてくりゃ俺たちが本丸に突入できる・・・頼んだぜ！」

「その事だがナギ・・」

「何だレイ？」

「俺は先に外野を減らしてからいくわ。そのほうが混成部隊が楽になるからな・・」

「そうか・・わかった。そういうことだそうだ。」

「ハッ！それであの・・ナギ殿？」

「ん？」

「ササ　サインお願いできないでしょうか？」

「おあ？ああいいぜそれくらい・・」

「そ　尊敬していました・・・あとレイ殿サインと・・」

「サインぐらいいいぜ・・・ハイ。」

まさか俺のまで欲しがるとは・・・

「あとなんだ？」

「わ　私をののしってください！」

ハ？・・・・・・・なぜに・・・・・・・・・・

「お願いします！」

セラスってこんな性格だったか？

「あ、ああわかった。ん～～しっかり仕事しれ！このバカが！！」

こんなかんじか？

「ありがとうございます！」

ちなみにセラス殿はレイのファンクラブ会員らしい。しかも一ケタ台らしい。あとなぜかレイのファンクラブにはＭの人が多いらしい・・・

～　セラス　ｓｉｄｅ　～

レイ様がわれわれと一緒に戦ってくれるらしい。とても頼もしい

「ハッ！それであの・・ナギ殿！」

「ん？」

「ササ　サインお願いできないでしょうか？」

サインなんてずうずうしかったでしょうか？

「おあ？ああいいぜそれくらい・・」

やったぁーーー

「尊敬していました・・・あとレイ殿サインと・・・」

レイ様はサインをくれるでしょうかあともう一つ大事な事が・・・

「サインぐらいいいぜ・・・ハイ。」

レイ様のサイン！一生家宝として大事にします！レイ様のファンクラブ一ケタ台として！！！

「あとなんだ？」

これはさすがに無理でしょうか・・・

「わ　私をののしってください！」

レイ様のファンクラブに入ってからなぜかMになってしまった・・・
まあレイ様に対してだけだけど・・・レイ様のファンクラブに入る
となぜか大半の人がレイ様に対してだけはMになるらしい・・・

「・・・・・・・・・・」

「お願いします！」

引いてしまったでしょうか・・・

「あ、ああわかった。ん～～しっかり仕事しれ！このバカが！！」

「ありがとうございます！」

レイ様にののしられたなんて一生自慢できる！！！

～　セラス　ｅｈｄ　～

「フフ・・・レイは人気ですね。」

「うるせぇアル！それよりガトウ、そっちはどうだ？無理そうか？」

「ああ、連合の正規軍説得は無理そうだ・・・帝国も無理そうだ。」

まあ原作でもそうだったし・・・なんとかなるっしょ！

「そうか、ならもう行くか？」

「レイ！連合と帝国を待たないのか？」

「なんだ怖気ずいたのか詠春・・・」

まあ詠春らしいといえばらしいが・・・

「いやそんな事は・・・」

「アリカ姫も言ってただろ？俺たち紅き翼（アラルブラ）は８人しかいないが最強の８人だ。」

それでも創造主（ライフメイカー）には勝つの難しいけどね・・・というか自分を創造？したものに勝つナギとか最強のバグキャラだな・・・

「そうだぜ詠春！」

「ナギ・・・」

「よぉし行くぜぇ！野郎ども！！！」

「おお！！！」×7

「ナギ！まず俺が道を作るからそこお行け！」

「わかた！」

「フフフ・・・」

フフフ・・・久しぶりに本気を出せるかな。最近はこんなに相手する事もなかったし・・・楽しみでしょうがない！ひさしぶりにＰＳ（サイ）

Ｉ全開で使うか・・・

「フフフ・・・ナギ少し離れとけ・・・」

「ああ・・わかった。（怖すぎるだろ！）おい、みんなも離れとけ。
」

「やるか・・・」

あれ以外と発動するのに時間がかかるんだよな・・・

オオオォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ヴヴヴヴヴ・・・・・・・・・・・・

そろそろかな・・・

「怨むなよ・・・怨むなら俺の敵になってしまった自分を怨め・・・日輪”天墜”」

カッ・・・・ドォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「3分の1程度も残ったか・・・意外と残ったな・・・」

直撃した召喚魔や自動人形などは言うまでもなく死んでいる（死ぬと言う表現は少しおかしいが）・・・というか死体さえ残っていない。ある程度離れていたものも熱で溶けている。さらに離れていても衝撃波とかで飛んできたもので押しつぶされたりしている。

「何してるナギ！速く行け！」

「あ・・・ああ行くぞ野郎ども！！！」

～　ナギたち　ｓｉｄｅ　～

「さっきのはなんだったんだ？」

移動しながらナギが他のメンバーに聞いてみる

「さあわからない・・・アルはわかるか？」

詠春は隣にいたアルに聞いてみる

「・・・・・」

アルもわからないのか一人黙っている・・・

「あれはたぶん・・・」

「わかるのかアル！」

ほかのメンバーを代表してナギが言う

「光を捻じ曲げているんじゃないでしょうか・・・」

自信なさげにアルは答える

「そんな事できるのか魔法で・・・ゼクト殿、あのようなことを魔法で起こせるのですか？」

「少なくともわしは光を捻じ曲げれるほどの魔法は知らん・・・」

「そうですか・・・」

「・・・・・」

一人なぜか黙るナギにアルが話しかける

「ナギ、やはりあれはレイが言っていた・・・」

「そうじゃねいか・・・」

「おいアルとナギ。レイが言っていたのってなんだ?」

詠春と同じように聞きたそうにしている

「実は・・・レイは超能力者だって・・・」

「レイは超能力とは言わずたしか・・・PSI(サイ)と言っていましたが・

・・」

アルが少し訂正する

「レイが超能力者？なんだよそれ。」

ラカンに言っても無理と思うのかアルは訂正しなかった

「でも・・・

ズゥオォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

「な・・なんだ？」

慌てる詠春

「レイじゃないでしょうか？」

いたって冷静に答えるアル

「野郎ども！」

いきなり大声を出すナギ

「どうしたんですかナギ？」

「今はそんな事言っている場合じゃねぇ。レイがせっかく外の奴らを相手してくれてんだ。今のうちに俺たちはさっさと中心部まで行くんだ！」

ナギの言葉に全員がうなずく

「行くぜ！！！」

ナギの言葉に勢いずくメンバー

その行く先にあるのは未来か無か、はたまた別のものか・・・

～　ナギたち　ｅｎｄ　～

「セラス殿！」

「は、はい！」

いきなり呼びかけられ驚くセラス

「大体はかたずいたからあとはまかせる・・・俺も行く最深部に向かう。」

「わかりました！」

ただ満足したからやめたとは思っていないのはセラスだけではないだろう・・・さっき日輪”天墜”を落としたあとまだある程度残っていたので”生命の門（セフィラ・ゲイト）”を全力で落としたの敵を全滅させるどころが穴が開いてしまったのである・・・というか空中に浮かんでいるので貫通してしまったのである。幸い最深部には深刻なダメージはなかったが・・・

～　墓守人の宮殿　最新部に移動　～

レイが到着したときはちょうどナギが創造主の攻撃を受けるところだった。

「ナギ！！！」

「！！！いかん。最強防御。」

「暴王（メルゼズ・ドア）の月！！！」

間に合うか！

ドッォーーーーーーーン

くそ・・・間に合わなかったか・・・

「だいじょうぶか！おまえら！！」

「なん・・とか・・・」

やばいな・・原作と違ってナギもやばいな・・・仕方ない一人でやるか・・・

「おまえらあれは俺にまかせろ！」

「いけませんレイ！一人でかなう相手ではありません！！」

「ならわしも行こう。わしが一番傷が浅い。」

「おれも・・・」

「ナギお前は休んでろ！傷が酷いだろ・・・」

ナギが死んでネギが生まれなくなったら困るからね・・・

「じゃあいくかゼクト・・・」

「ああレイ！」

〜　創造主との戦闘後　〜

・・・・・・・・・創造主との戦いの結果、俺は創造主と相打ちになってしまいました。てへ☆
ちなみにゼクトは原作道理死んだ。いろいろ考えているうちに俺の意識はなくなってしまった。

〜　式典後の紅き翼（アラルブラ）　side　〜

「まさかあのゼクト殿とレイが逝ってしまうとは・・・」

少し悲しそうに言う詠春。

「ははは！あの妖怪じじいとレイは殺しても死なねぇ気がしていたんだがまあ戦争だしょ。ほかにも大勢死んだ！」

笑いながらラカンが言う。

「みんな・・これ・・・」

ナギが何かを取り出す。それが何かわかったのかアルが答える。

「レイの・・・仮面ですか？」

「ああ・・・」

ナギがレイの仮面をテーブルに置く。

「まだ信じれねぇえなあいつらが死んだなんて・・・」

「ああ・・・死んだ奴等と世界平和に・・・」

この話はラカンが閉めて終わった。

～　式典後に紅き翼（アラルブラ）　ｅｎｄ　～

第9話　最終決戦（後書き）

今回の終わり方が今回で完結みたいな感じになってしまいましたが
まだまだ続きますのでこれからもよろしくお願いします。
あと新しく”史上最強の兄”と言うものも書きましたのでそちらも
よろしくお願いします。ちなみに原作は”史上最強の弟子ケンイチ
”です。

第１０話　久しぶりに神登場（前書き）

どうも暁です。
夏休みも残り少ないし「史上最強の兄」の方もあるので更新がこれからは少し遅くなるかもしれませんが一週間に一度は更新したいと思います。

第１０話　久しぶりに神登場

第１０話　久しぶりに神登場

創造主と相打ちになった俺は何故か何もない真っ白な空間にいます。”何もない真っ白な空間”でわかった人もいるかもしれないけどわからない人のほうが多いだろう。そう。ここは俺が転生するさいに神（笑）と会ったところだ。あれからもう何千年もたったが何故か懐かしい気がする。

「久しぶりだな！」

転生前の事はもうあまり覚えていない。

「何千年ぶりだ？」

それだけ長い時間が過ぎた。

「その体ももうなれたか？」

十分生きたと言えるだろうか。

「・・・・・・・・・・」

まあ何千年も生きてまだ十分生きていないといったほうがおかしいが、名残惜しい事と言えばネギと合えないまま死んでしまった事か・・・ネギが麻帆良で担任をする所らへんからさらに面白くなるのに。

「くらえ!!!神様キィーーーーーーーーク!!!」

ぐしゃ

「ふべぇら!!!」

軽く裏拳を放ったら「神様キィーーーーーーーク」とか叫んでいる神の顔面に何故かうまい具合に入った。

「なんだ・・・糞（神）か・・・相変わらずだな。フフフ・・・」

神がなぜか面白格好で地面に刺さっていたので思わず笑ってしまった。

「誰が糞じゃーーーーー！！！！それに貴様のせいだろ！！！！」

「なにいいがかりつけてくれてんだよ・・・俺はただ腕を回しただけだぜ？それとも腕を回しちゃいけないのか？人権侵害だぞこの糞が。糞に成り下がったとしても神が人の人権を侵害していいのか！ああ？？？」

怒っているがまだ神は地面に刺さったままだ。

「糞なんかに成り下がってねぇし！しかも何が人権だ。お前はもう人間の枠を超えているだろ！」

「ああそう・・・というか糞。なぜ俺はまたここにいるんだ？」

「なあ糞ってもう神でもなくね・・・お願いだから糞はやめて・・・」

「仕方ない・・・せめて神（糞）にしてやる！」

「もうそれでいいわ・・・まあお前がここにいるのは簡単に言えば死んだからだ」

「そうか・・・」

「生き返りたくないか？」

「死んだｎ・・・は？」

軽くフリーズしてしまった。

「だから生き返りたくないか？」

「生き返れるのか？」

がくがくがく神の首を揺らす。

「ちょまって・・・首を揺らさないで・・・まじやめて・・・ちょっとはきそう・・・」

～　１０分後　～

「は～まだはきそうだ・・・」

まだ気持ち悪そうに言う神。

「それより本当に生き返れるのか！」

「ああ。ただお前の体はかなりのダメージを受けているから直すのに結構時間がかかるが、それでもいいなら生き返れるぞ」

「ああ生き返らせてくれ」

即答する。

「体を修理している間また違う世界に転生もできるがするか？」

「まじ？」

「あああまじ。ただし違う世界に転生するなら新しい体を作らないといけないけど・・・まあ身体能力や今使える技とかはそのまま使えるけど」

まじめな顔で言う神。

「よっしゃ！ありがとう神様！」

様がついて嬉しそうにする神。

「それなら早速転生させるが言いか？」

「ああ！」

「じゃあ逝くぞ！」

「おい神なんか行くが逝くになっていないか？」

「気のせい・・・だ！」

そう神が言うとレイの足元に穴が開いた。

「またかよ～～じぇろ～にも～～～～～～」

そう久しぶりに某格闘少年の言葉を言いながらレイは重力にしたがって穴に落ちた。

第１０話　久しぶりに神登場（後書き）

ここからは違う世界に転生しますがしっかりネギま！の世界に戻るのでこれからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7784m/

チート転生！！

2010年12月14日17時57分発行